九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

移動・開発・場所とフィールドワーク : パプアニューギニアの動態地誌

熊谷, 圭知

https://hdl.handle.net/2324/1807132

出版情報：Kyushu University, 2016, 博士（文学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

区分	乙

論　文　内　容　の　要　旨

移動・開発・場所とフィールドワーク
――パプアニューギニアの動態地誌――

熊谷　圭知

本研究の目的は、筆者のこれまでの 37 年間のパプアニューギニアでの調査研究に基づきながら、移動・開発・場所・フィールドワークをキー概念として、その動態地誌を提示することにある。フィールドワークとは、研究対象の存在する場所に身を置いて、一次資料を集める調査方法である。筆者の考える動態地誌とは、フィールドワークに根ざし、地域を重層的なスケールの相互作用として描きながら、読者にその地域への共感的理解を喚起するような地誌のことである。

「研究の基本概念」と題した第 I 部（第 1 章）では、「移動」「開発」「場所」の 3 つの概念を検討した。「開発」には、1）外部者による「開発的介入」、2）西欧化・近代化、3）経済効率的な資源の利用、4）よりよき生の実現のための実践、の意味があるが、現状の「開発」においては（パプアニューギニアの辺地を含め）4）が 1）・2）・3）に引き寄せられ、持続可能なものにならない。「場所」とは「空間的近接性を契機として生み出される人と人、人と事物、事物と事物の間の関係性の束、あるいはそれが実体化した空間」である。「地域」は場所的関係性に基礎を置くが、何らかの権力や制度が介在し、領域性を持つ空間である。場所がミクロレベルで生成するものであるのに対し、地域はマクロレベルで構築されるものである。

植民地化以前のパプアニューギニアの人々は、「移動」を通じて、あらたな「場所」を構築し、よりよき生の実現としての「開発」を実現しようとしてきたといえる。しかし植民地化そしてパプアニューギニアという国家の形成以降、人々の実践は制約され、葛藤が生まれている。

「パプアニューギニア地域誌の再構築」と題した第 2 部では、こうした葛藤の様相を具体的な場所を通じて描いた。オセアニア地誌（第 2 章）、パプアニューギニア地誌（第 3 章）を再構築し、次に同国内の 3 つの地域――高地周縁部ミアンミン（第 4 章）、首都ポートモレスビーにおける高地のチンブー州出身者の移住者集落（セトルメント）(第 5 章)、セピック川南部支流域のブラックウォーター（第 6 章）を取り上げ、新たな地(域)誌を提示した。

ミアンミンの人々が暮らすのは、パプアニューギニア高地周縁部であり、都市や開発の場所から遠い奥地である。一見したところ昔ながらの生活様式が残るミアンミンの人びとは、植民地化によって移動や戦争を通じたダイナミズムを奪われ、閉塞している。人々にとって飛行場の建設は外部とのつながりの機会を作る手段だが、それも実効性を得られていない。

首都ポートモレスビーは植民者のための都市空間として建設された。第二次大戦後、その隙間に移住者によりセトルメントが形成された。都市に現金収入と新たな生活機会を求めてやってきたチンブー人移住者は、インフラが整わないセトルメントの日常と、都市空間の美化という大義の下で露天商などの生業活動が排除されることにより窮乏化している。

ブラックウォーターの人々は、氾濫原と湿地林の動植物との間に、生業（サゴヤシ澱粉の採取と漁労・狩猟）だけでなく、神話やクランのシンボルとして社会的・象徴的にも緊密なかかわりを維持し、精緻な場所の知を構築している。一方で植民地政府および日本兵との出会いや、秘境観光の対象となることで変容し、「祖先と同じ暮らし」を続けることへの葛藤も抱えている。

「フィールドワークと場所構築」と題した第 3 部では、私自身のパプアニューギニアにおけるフィールドワークと「開発」の実践を語った。フィールドワーカーが単にフィールドで調査研究を

してデータを持ち帰るだけであればそれは知的な搾取にほかならない。対象社会への「還元」をめざした筆者の実践は、ポートモレスビーにおける JICA 専門家としての都市貧困対策とセトルメント改善への取り組みであり、ブラックウォーターのクラインビット村での村人と協働した学校建設と、自らの調査研究のピジン語での提示であった。フィールドワーカーは二つの異なる世界の間にある(in-between)存在である。調査研究者の役割は、アカデミズムの世界を含めて新たな「場所」を生成し、私たちの側に独占している「知」（学問知）を双方向的なものにつくりかえることを通じて、二つの世界をつないでいくことであろう。